

1968年パリ、五月革命の路上で

Sten Johansson

“Sesdek ok”

Mondial, 2020, 185p

この作品のタイトルは世界的な激動の年であった 1968 年を指している。もっとも、多くの人には 1968 年といっても何のイメージもわからないかもしれない。私事で恐縮ながら、私は、この年は田舎の高校一年生で、週刊誌(朝日ジャーナルとか週刊アンポとか。当時はそういう週刊誌があったのだ)などで日本の大学紛争、ベトナム反戦運動、パリ五月革命、プラハの春とその終焉、中国の文化大革命といった世界の情勢を、息を詰めて見ていた。あれからもう半世紀以上が過ぎてしまったのだ。

私の場合は遠くからそれらの大事件を眺めていたにすぎないが、この作品の語り手のビョルンは、まさに身をもってその大事件に遭遇したのである。彼はスウェーデンの大学生。語学好きの非政治的な若者で、1968年1月にヨーロッパのいわば周縁の地であるスウェーデンからパリのソルボンヌ大学に短期留学し、その過程で図らずも五月革命に遭遇した。学生デモに参加し、警官に追われて辛うじて逮捕を免れたり、解放区となったカルチュ・ラタンや大学の祝祭的な雰囲気の中を歩き回ったりする。第8章では五月革命の経過が日を追って詳細に辿られている。

もっとも、ビョルンはノンポリで、旧態依然としたソルボンヌでの講義にうんざりしてはいるものの、五月革命がどのような政治、社会状況のもとで起こり、何を訴えようとしたのかといった点について格別強い関心を抱いているようには思えない。五月革命が急速に終焉を迎えたことと相まって、次の章では、彼の関心はパリで親しく交わった二人の女性、ダニとそのルームメイトのマリー＝フランスのことに移っていく。ダニはエスペランティストで、ビョルンとは前年にスウェーデンで行われた SAT の大会で知り合ったのである。

ダニとマリー＝フランスは、地方出身で底辺に近い労働者。大学へは行っていない。彼女たちの目に映じるパリは強固な階級社会で、彼女たちは五月革命と学生に熱い共感を抱いている。ダニは熱心な読書家で、作中ではデュラス、サガン、サリンジャーなど当時の流行作家の名前が登場する。ビョルンは彼女にボーヴォワールの『第二の性』をプレゼントし、彼女は、さしてうれしそうでもなくその本を受け取る。また彼女はアルベール・カミュの作品を読むことを拒否するが、それはカミュがピエ・ノワール(アルジェリアからの引揚者)

で右翼であるからだという理由だった。このあたりのダニの読書傾向についての記述はおもしろい。なお、ビョルン自身も小学校卒の鉄道員の息子で、家族で大学に進学したのは彼が最初である。

他方、スウェーデンでビョルンと同棲していたイングリッドは大学生で、父親は会社を経営し、田舎に別荘を所有している。ビョルンは、知的で積極的な彼女に引け目を覚え、彼女が自分よりも上の階層に属していると感じている。そうした階層差やそれに伴う文化資本の差も具体的に描かれていて興味深い。

ビョルンがパリに滞在している間に、イングリッドは毛沢東主義の過激なセクトに入り、外部から遮断された環境で暮らすことになる。そのセクトの成員は、毛沢東の文章を暗記し、内部での相互批判や自己批判を通じて、組織と思想の純化を図ろうとする。彼女自身も自己批判を強要され、幽閉されるが、セクトが解体したおかげでそこから逃れる。しかし、その後も、そこで被った深刻なトラウマから抜け出すことができない。ビョルンは帰国後、彼女に会い、対話を試みるが、心を閉ざした彼女との対話はうまくいかない。

ある評者は本書をクリストファー・イシャーウッド(1904～1986)の小説『さらばベルリン』(1939)をもとにしたブロードウェイ演劇『私はカメラ』を想起させると述べている。これはナチスが台頭しつつあった1930年代初頭のベルリンを舞台として、イギリス人学生とアメリカ人のキャバレー歌手との恋愛を描いた作品である。ライザ・ミネリが主演した映画『キャバレー』(1972)の原作でもある。作中では女性が意志的に活動し、男性はそれに翻弄される。その主人公同様、ビョルンもいわば受動的な存在であって、1968年に自分が何を体験したのか、パリでは何が起こったか、そうしてイングリッド、ダニ、マリ＝フランスという女性たちの当時の行動がどういう意味を持ったのかを考えるために手記を書くことを思い立つ。

作者のSten Johanssonは1950年生まれ。本作品は老年に差しかかった作者が自身の同時代体験を反芻しつつ書いた青春小説としての側面を持っていると思う。文章は練達の作者らしく、きわめて読みやすく、女性たちとの会話も生彩がある。3人の女性たちとの会話、また、気位の高いイギリス人の女子学生やロンドンの病院の看護師との気まぜい会話のシーンはことに面白い。

なお、版元のMondialはニューヨークにある出版社で、原作文学、翻訳、ノンフィクションなどエスペラントで書かれた本を精力的に刊行している。作者は2021年にもやはりMondialから”Secesio”を刊行している。1920年代から30年代にかけてのウィーンを舞台として、戦間期の激動する政治、文化状況を描いた小説である。これについてはまた後日。

(La Movado2021年10月号掲載。なお、転載にあたって一部表現を改めた)